

日本語教育アシスタントの対人態度の変化と 日本語教育の関わり

広瀬 研也

1. はじめに

本稿では海外における日本語アシスタントの成長を通して、日本語母語話者に対する、いわゆる日本語教育の有用性を考察し、日本語母語話者が日本語教育の授業に参加することによって生じる結果の外国人学生へのメリットについても同時に考察する。

著者は現在、ベトナムのハノイ工科大学(SIE ツイニングプログラム:注1)で日本語を教えている。ここには常勤・非常勤の教員の他に、長岡技術科学大学の4年生が派遣され「実務訓練生」として半年間職業実習を行っている。本来なら理工系の学生なのでメーカーや工場で実習をするのだが、ツイニングプログラムの学生に対して日本語による専門基礎科目を教えるため、理工系を専門とする実務訓練生が必要となっている。

今まで、学生の送り手である長岡技術科学大学によって、この実務訓練生に関しての調査は度々行われ報告書にまとめられている。それによればこの実務訓練に対して肯定的な意見が多く、有効性を認める結果が報告されている。ただ、これまで日本語教育の分野からされた報告はあまりなく、あっても現地の日本語教育に役に立ったか否かを問う程度の簡単なものが多かった。そこで本稿では、本来理工系の学生であり、日本語教育には関わりがなかった実務訓練生が日本語教育に関わることによって、どのような変化があったのかを、月間及び週間報告書等の中から抽出し、その効果を考察したい。またその結果が実務訓練生個人や、現地の日本語教育スタッフのみならず、外国人学生を受け入れる日本の大学にも影響があるのではないかという点にも

言及したい。

2. 日本語教育アシスタントの関わり方の流れ

助手・アシスタント・実習生等呼び方は色々あるが、教師の傍らで授業その他を手伝う人を本稿では「日本語教育アシスタント」と呼ぶ。日本語教育アシスタントが日本語教育に関わるようになるには、まず最初に日本語教師の要請を受けてのことだっただろうと想像される。要請と言うよりも「興味があるなら、手伝ってくれない？」という日本語教師のお願いだったかもしれない。

その後、将来日本語教師を希望する人が、授業見学・授業体験も兼ねて、どちらかと言えば自発的に参加するようになったと思われる。このように日本語教育に関心を持つ人が増えてくると、岡崎(2008)で述べられているような「共生的日本語教育」という観点から、日本語教育アシスタントにも得るものがあるのでは、といった研究も散見されるようになる。

そこで筆者はさらに次の段階として、上述の経過を踏まえた上で、再度「外国人学習者」ととしての日本語教育のメリットということを考えてみたい。そのメリットとは上述のような形で日本語教育に関わった人々が別な場面で外国人とコミュニケーションをとる際に、相手の話そうとすることをより聞ける姿勢にあるのではないか、よりコミュニケーションを持とうとする姿勢になるのではないかということを、以下の考察を通じて考えたい。

3. 調査の方法及び対象

今回、調査対象に選んだ実務訓練生は2009年9月から、ハノイ工科大学に在籍している、長岡技術科学大学機械創造工学課程の4年生(男性)である。本稿を執筆している時点(2010年01月)では、まだ実務訓練生としてハノイ工科大学で実務訓練中である。

調査の方法は、この実務訓練生が書いた月間・週間報告書を資料として、その文面に表れた異文化間交流に関わる部分を抜き出し、それを時系列に並べてその変化を比較した。

4. 報告書に現れた変化

4-1. 月間報告書に現れた変化

まず、全体的ものを見ていただくために、2009 年 09 月分に関しては月間報告の訓練内容（内容・所感）の全文を見ていただきたい。

訓練内容（内容・所感）

NUT06 期生（注 2）の物理の授業を担当しています。その際に必要となる教材に関しては、日本語留学試験の問題集から傾向を調査しています。また、一昨年度、昨年度の海外実務訓練生の先輩達が残っていた資料も参考にしています。授業を通して感じたことは、学生は一度物理を習っているのです、意味をきちんと理解できれば、問題を解ける能力を持っていることが分かりました。ですが、問題文は日本語で書いてあるため、多くの語彙力をつけておかないと、解きにくいように感じました。そのため、今後、どのようにして語彙力を短い時間で上達させていくのが、大切だと思いました。あと、宿題を提出しない学生が多いので、これについての対策も検討しています。その他にも同 06 期生には、レポートの製作についての授業も担当しています。まず初めに、簡単に工学系のレポートの書き方を説明して、実験を行った後に、レポートを提出させてフィードバックを行い、より詳細なレポートの書き方やパワーポイントの発表の仕方について教えていきたいと考えています。

NUT08 期生の授業では、ひらがな、カタカナの発音及び書き取り等といった簡単なサポートをしています。この授業では、日本語に触れる学生がほとんどのため、積極的に授業を受けているように感じました。

この所感の中で、ベトナム人学生に対する所感・感想と言える部分は、以下のとおりである。

9-1「授業を通して感じたことは、学生は一度物理を習っているのです、意味をきちんと理解できれば、問題を解ける能力を持っていることが分かりました。ですが、問題文は日本語で書いてあるため、多くの語彙力をつけておかないと、解きにくいように感じました。」

9-2「宿題を提出しない学生が多いので、これについての対策も検討しています。」

9-3「この授業では、日本語に触れる学生がほとんどのため、積極的に授業を受けているように感じました。」

次に同様に、10月、11月、12月の月間報告書から、ベトナム人学生に対する感想と思われる部分を抜き出した。

10月月間報告書より抜粋

10-1「宿題を提出する人と提出しない人の差が出てき始めており、提出しない学生には、呼びかけてはいますが、一度だけ提出するといった状況が続いています。」

10-2「一度実験を行ったので、そのレポートを締切日までには提出するよう言ったのですが、期限内に提出した学生は一人もいませんでした。その後、期限を延期してようやく学生全員がレポートを提出しました。」

10-3「どの学生も共通して思ったことは、スライドを見ながら横を向いて発表していたり、読めない漢字が多かったことです。ですが、中にはきちんと準備をして内容もよくまとめてから、発表に望んだ学生もいました。」

10-4「同08期生は積極的に書き方を聞いてくる学生が多いです。しかし、最近の授業では、発音を聞いてひらがなやカタカナが書ける学生と書けない学生の差が大きくなってきたので、書けていない学生を中心にサポートしていきたいと考えています。」

11月月間報告書より抜粋

11-1「相談していた始めのころは、日本の大学に留学したい理由が、「車について勉強したい」などと漠然としていました。ですが、相談する回数を増やしつつ、しっかりと目標を持ち、将来のことを考えている6期生もいました。」

11-2「自分から積極的に大学の特色を調べる学生が少なく、惰性的な行動が多いような気がしました。」

11-3「6期生は、以前に材料学に近い分野を勉強していたので、専門用語や現象については、最初は戸惑っていましたが、かみ砕いた日本語で伝えるとよく理解していました。」

11-4「8期生は積極的な学生が多く、よく質問してきます。文法的な間違いは多少あったりしますが、ひらがな、カタカナも含め漢字の書き間違いはあまりみられません。ですが、漢字のテストの時に横の人に聞いたり、教科書を見たりするカンニング行為が多いです。試験をしているという雰囲気になりづらいのが残念です。」

12月月間報告より抜粋

12-1「試験の結果だけで評価すると、基本的な問題であればしっかりと理解して解けているように思います。ですが、自分の答えに自信がないのか、隣の人の答えを確認したり、電卓の貸し借りをその場でしたりするなどのカンニングに近い行為に見られるのが何度かありました。事前に注意はしておいたのですが、もう一度試験の受け方について説明した方がいいと思いました。また、総合的な評価になると、遅刻や欠席が多く、宿題を提出しなかった学生もいたので、全体の平均点は下がっています。結果として頑張っていた学生には、きちんといい結果が出ているように思いました。」

12-2「学生にとって、自分が考えている事を日本語で文を作るのが難しかったため、今回の願書を書くという事は、良い経験になったと思います。これからもその経験を生かしてほしいです。」

12-3「学生が多く、積極的な学生も多いので、授業は賑やかなのですが、騒がしやすくなりやすい気もしました。少しずつ注意して行って、騒がしくはならないようにしたいです。」

所感だけ見ても分かることだが、訓練内容（内容・所感）全体で見てもこの12月が一番文量が多く、他の月より増えた部分はベトナム人学生に対する所感の部分である。慣れてきて多くの事が見えるようになった、とも言えるだろう。また9月、10月よりも、11月、12月の所感のほうに、より多くかつ具体的にベトナム人学生の負の部分が現れている。しかしながら、11-1や

11-3 で現れているように、その負のイメージを生んだ原因まで考察し、それを改善するために具体的に自分は何かができるかというところまで、文面に出るようになってきている。それが 9 月、10 月との大きな違いではないだろうか。また 11-4 も、ベトナム人学生の負のイメージに対して、その負をせめるのではなく、それを見た自分が残念だという、自分の気持ちを表現するようになっている。

それぞれの月間報告は当該月の月末に書かれる。(注 3) 10 月の月間報告と 11 月の月間報告で差があるということは、11 月中に、この実務訓練生の態度変化の転機が訪れたものと考えられる。そこでそれを確認するために、次に週間報告書の中からベトナム人学生に対する所管の部分を取り上げる。

4-2. 週間報告書に現れた変化

ここでは、実務訓練生の態度変化があったと思われる時期、具体的には 10 月の月間報告を書く前後の週から、11 月の月間報告を書く週までの週間報告について考察する。11 月の月間報告を書く週までの週間報告を取り上げてみたい。報告書に現れた具体的な表現については本文末の資料を参照いただきたい。

週間報告書の中で着目したいのは理由の類推が出てくる時期についてである。

例えば第 5 週・第 6 週には、ベトナム人学習者の行動面の記述にとどまっている。しかし、第 7 週には否定的な見方をした後で「留学試験が近いためだと思われる。」とその理由を類推する文が初めて表れる。第 8 週、第 9 週にもそれぞれ「留学試験が終わったためか、学生が非常に少なかった。」「しかし、集中力があまりないためか、長続きしない。」のように「ためか」で理由を類推する文が見られる。第 10 週では「らしく」第 11 週では「ので…気がした」と言い方が変わっているが、同様の文型が見られる。否定的な所感であっても、その背景に思いが行くようになってきている。これは、相手の態度を否定的に捉えながらも、それがなぜ起こるのかを類推することでできるだけ相手の立場を理解しようとする態度の表れだと思われる。

また第 7 週に「残念だった」という表現があるが、同じような表現は第 9

週に「残念だった」第 11 週に「残念だったが、」第 12 週に「取り組んでほしかった」第 13 週に「動いて欲しい」のように、以降否定的な所感の後で本人の気持ちや願望を述べる文が第 7 週以降出てきている。これもそれ以前には見られない文型である。

5. 実務訓練生の態度変化が意味するもの

先述の月間報告と合わせて考えると、第 6 週が 10 月の月間報告を書いた週である。これらから考えてこの実務訓練生は、第 7 週目から、ベトナム人への姿勢の変化が見られると考えてもよいだろう。そしてその変化はありきたりな言い方をすれば「慣れてきて背景が見えるようになった」と言えるだろう。その慣れに到達するまで、この訓練生の場合は 6-7 週間かかっている。ここでこの 6-7 週間という時間が長いのか短いのかについては比較対象がないので論じられない。また、日本語教育に関わった時間数も授業数で言えば、一週間に担当或いは見学する授業が 7 時間程度だったので 40 時間前後と言えるが、常にオフィスで日本語教員たちと接していることも含めれば、厳密な意味での日本語教育に関わった時間数を算出することも困難である。そのため数字によって目安をここに示すことはできないが、変化の流れは提示することが可能である。すなわち

1. 否定的な所感のみ
 2. 否定的な所感 + その理由の類推 (≡ 好意的な所感)
 3. 「-ができない」から「-までならできる」への変換 (≡ 肯定的な所感)
- といった流れになるだろう。もちろんこれが一方向のみに進むわけではない。この実務訓練生の所感を見てもそうだが、何度も後戻りしながら、ただし全体的には、1. の文が多かったところから 3. の文が多い状態へと移行していると思われる。

もう一点注目しておきたいのは、NUT06 と NUT08 では、NUT06 よりも NUT08 のほうに肯定的な所感が多いことである。この実務訓練生に関わった授業数は NUT06:NUT08≡3:1 で、明らかに NUT06 に関わっている時間が多いにもかかわらずこの結果となっている。NUT06 が 3 年生、NUT08 が 1 年生と考えると、日本語が通じにくい NUT08 のほうで、肯定的所感の割合が多いのは何を

意味するのだろうか。詳しくは今後の課題としたいが、可能性としては初級の学生のほうが日本語能力の変化（上達）が分かりやすく、その分「-までならできる」という、能力の上限がはっきりするためではないだろうか。この点については外国人留学生の授業に日本人ゲスト・スピーカーを迎える際の留意点となるかもしれないが、ここではその可能性があるというだけに留めたい。

6. 外国人学生への有効性

このように日本語教育に関わることで、実務訓練生が外国人学習者の態度を否定的から肯定的に受け取るようになったことを示した。このことはこの実務訓練生を他の実務訓練生と比較した場合、より顕著である。これは筆者の単なる感想であるが、同時期にある日系のメーカーに派遣された実務訓練生は、外国人学生に対してコミュニケーションを持とうとする態度があるようには見えなかった。もちろん個々の性格ということもあるので一概には言えない。しかしながらこのメーカーに派遣された実務訓練生のプログラムに日本語教育に関するものがあれば、変わったのではないか、と思えてならない。その理由は実務訓練の期間中に一度だけ、私的に日本語学習者を集めた談話会に参加してもらったところ、その時のベトナム人学習者への感想が非常に好意的で、かつ本人も積極的にコミュニケーションをとろうとしていたからである。これは私が見る限り普段のこの実務訓練生の姿からは想像もできないことであった。このような日本語教育への関わりがより計画的に組み込まれていたとすれば、この実務訓練生にも顕著な変化が見られたのではないかと筆者は考えている。

筆者の経験から、日本の大学へ留学した経験のある外国人学生に、日本人の印象を聞くと「冷たい」「あまり話そうとしてくれない」という答えが少なくない。これは応対する日本人のほうに外国語が苦手という思い込みがあるから、どうしてもコミュニケーションに及び腰になるのだろう。その気持ちは筆者も分からないではない。しかし、西口（2008:注4）が指摘するように、人間関係ができてから話すのではなく、話すことによって人間関係を築いていくことのほうが、我々の生活では多いだろう。そうだとすれば、外国人学

生とのコミュニケーションに及び腰になることは、人間関係を築くことから逃避している、或いは人間関係を築くことを拒否していると、とらえられても仕方がない。それが日本人が「冷たい」という言葉に端的に表れている。

筆者もどうすればいいのか、という外国人学生の問いに外国人学生の日本語能力を高めることで問題解決を図ろうとした。しかしこれには2つの問題点がある。1つは、時間である。特に日本の大学で生活する外国人学生は、まだかなりの部分が日本語による講義を受けている。講義を受けるための日本語、アカデミック・ジャパニーズの一部、だけでも学生に身につけてもらうにはかなりの労力を要する。門倉他(2006)では講義を受けること意外に、友人と交際する場合の日本語もアカデミック・ジャパニーズの中に含めているが、少なくともこれらを満足のいくまでの能力に高めるためには学習時間が不足していることは明らかである。これが問題の第一点。次に、こちらのほうがより根本的な問題なのだが、コミュニケーションが本来双方向であることを考えると、コミュニケーション成立の為に一方にのみ負担を強いているものだろうか、という疑問が生じる。つまり、外国人学生が日本人とコミュニケーションを取るために、外国人学生だけが日本語能力を高めるという努力をしなければならないのか、という疑問である。日本人のほうも外国人とのコミュニケーションをとる姿勢を示すべきではないだろうか。それは例えば青沼(1995、注5)が指摘するように、歩み寄りの姿勢を示す、ということであり、歩み寄りの姿勢とは、お互いに話を聞く、あるいは聞こうとする態度であると筆者は考える。

実務訓練生の多くが帰国後大学でチューターを希望したり、その要請に快く引き受けてくれたりすることが多いということは、実務訓練経験者が外国人学生に対して「歩み寄り」の姿勢をとっているとも考えられる。実際、先述したように今年度の実務訓練生は明らかに相手を理解しようとする態度変化が見られた。外国人学生が彼らのような態度を持つ日本人に接したとき、少なくとも今よりは日本人のことを「冷たい」と感じる度合いは減るのではないだろうか。このような態度を取る人間が大学内で、あるいはキャンパスのある地域まで含めて、増加すれば外国人学生にとっては相当親しみが持てる大学ということになるだろう。

現在、日本の大学で、外国から、特にアジアからの留学生を増やそうとする努力の話を聞く。また政策としても留学生 30 万人計画が打ち出されている。もちろん、問題は単なる態度の問題だけではない。しかし、留学した結果、日本或いは日本人に対して幻滅する、あるいは期待を裏切られた感じを持つ学生がいるのも事実である。その原因について「日本人はこうだから」或いは外国人学生に対して「日本人と上手くコミュニケーションをとるには」と、今まで一方的に相手に理解を求めたり、負担をかけたりしてはいなかっただろうか。繰り返しになるが、コミュニケーションが双方向である以上、相手に態度の変化を求めるならば自らも態度を変化させなければならないだろう。その変化のひとつに開こう・理解しようとする「話を聞く態度」「できるところに着目する態度」ということが考えられないだろうか。そしてそういう態度が取れる日本人学生を増やすことが、今後外国人学生が増加する大学にとって必要なことではないだろうか。

7. 日本語教育の関わりと今後の課題

そして、今回の実務訓練生の例から、外国人学生に対する態度変化は、日本語教育に関わることで養成される可能性が見えた。このことは日本語教育の新たな側面を開拓することにつながるだろう。そのためにも今後以下のことを課題として取り組んでいきたい。

今回は初めての試みとして報告書・感想文に現れた実務訓練生の所感を基に、その変化を追った。次年度以降の実務訓練生に対しても同様の調査を続けていきたい。それと同時により実務訓練生に対するより詳しい面接・アンケートや、その因子分析、及び実務訓練経験者のその後、特に日本に帰国してからの所感にも注目する必要があると考えている。

また実務訓練生のこのような変化をベトナム人学生がどのように受け止めたか、という点も考察しなければならない。今回は実務訓練生が相手を分かろうとする態度変化を示せば外国人学生にとってもプラスになるという前提で論を進めたが、実際の人間関係はより複雑であろうから、その点により留意した調査を行う必要がある。

注1：SIE ツイニングプログラムとは2.5年間をハノイ工科大学において、専門基礎と日本語教育を行い、その後編入試験を経て日本のコンソーシアム参加大学に編入する制度。現在コンソーシアム参加大学は、長岡技術科学大学、名古屋工業大学、群馬大学、九州大学等約10校。

注2：NUTとは、本プログラムの入学者に入学年度ごとにつけられる番号。「第〇〇期生」と同じ。NUT06は2007年入学、NUT08は2009年入学。

注3：10月の月間報告は10月30日付、11月の月間報告書は12月1日付となっている。

注4：西口(2008)；そのようなおしゃべり日本語」の能力は、現代社会で文化的に生きる人間に必須の能力であると言ってよいだろう、人は日々の暮らしの営みや労働といった生きていくために必要な実用的な活動のみに従事するわけではない。文化的な人間の重要な要素は「何かについて（相互に）話し」「人と関わる」ことである。そして、現代の自然習得者はそのような日本語力を、ある程度数が限られた日本語話者との多かれ少なかれ個人的な交流を継続的に続けることで自然に習得していったのである。

注5：青沼(1995)；この事を無視して日本語や英語で渡り合おうとするのは傲慢というものだ。だが、自国語で話すのが最も楽だし正確に表現できることも事実である。そこで、この問題を解決する方法を提唱する。それは「Two Way Communication」である。

日本人は徹底してタイ語の聴解力をつける。タイ人には日本語の聴解力を身に付けてもらう。お互いに相手の言語の理解が可能になった上で、「日本人は日本語を話し相手のタイ語を聞く。タイ人はタイ語を話し相手の日本語を聞く。」というものである。言いたいことをスムーズに表現し、それが正しく理解される。両者がお互いに対等の立場でフェアにコミュニケーションできる方法だ。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、報告書・感想文を提供してくださった2009年度の実務訓練生に改めて御礼を述べる。

<参考文献>

- 青沼国夫(1995)「妄想—two way communication の提唱—」、「クルンテープ」
(タイ国日本人会機関誌) 1995 年 8 月号
- 岡崎陣(2008)「日本語ボランティア活動を通じた民主主義の活性化—外国人
と日本人双方の『自己実現』に向けて—」、「日本語教育」138 号 p14-23
- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子(2006)「アカデミック・ジャパニーズの挑戦」
ひつじ書房
- 西口光一(2008)「市民による日本語習得支援を考える」、「日本語教育」138
号 p24-32
- 古別府ひづる(2010)「大学日本語教員養成における海外日本語アシスタント
の成長—PAC 分析と半構造化面接による良き日本語教師観の変化を中心に
—」、「日本語教育」143 号 p60-70
- 丸山敬介(2005)「教師とコーディネーターのための日本語プログラム運営の
手引き」スリーエーネットワーク

(ハノイ工科大学ツイニングプログラム日本語講師)

資料 実務訓練週間報告書（ベトナム人学生に対する所感の部分の抜粋）

（第1週：9月21日～9月25日）

NUT06について

NUT08について

「この授業では、日本語に触れる学生がほとんどのため、どの学生も積極的に発音や書き方を聞いてきた。」

（第2週：9月28日～10月2日）

NUT06について

（記載なし）

NUT08について

「また、発音も正しい発音に近づいているように感じた。」

（第3週：10月5日～10月9日）

NUT06について

「学生全員がレポートの提出日に提出できなかった。」

「期限を延期したが、それでもレポートを書いて来ない学生が数名いた。」

NUT08について

「発音が難しいらしく、発音できていない学生が多かった。」

「学生のほとんどが書き間違いも少なく丁寧に書いていた。」

（第4週：10月12日～10月16日）

NUT06について

「宿題の提出率も前回に比べればよくなって来ている。」

NUT08について

「カタカナが書ける学生と書けない学生の差が少し出始めた気がした。」

（第5週：10月19日～10月23日）

NUT06について

「どの学生も共通して言えることは、スクリーンばかりを見て、横を向いて発表していた。」「また、質問の内容に的確に答えられた学生が少なかった。」

NUT08 について

「前に座っている学生は、積極的に発言しているので、覚えも早い。」

「しかし、後ろの席に行くにつれて、発言が減り、下を向いている学生が多かった。」

「学生のほとんどがひらがな、カタカナが書けるようになっていたが、発音を聞いてカタカナやひらがなを聞くのはまだ、難しいようだ。」

(第6週：10月26日～10月30日)

NUT06 について

「問題を重点的に解いた方が学生も集中しやすいように感じた。」

「学生のほとんどは大まかな進路を決めており、しっかりと書けていた。」

「しかし、なんとなく日本に行きたいと考えている学生も少しいた。」

NUT08 について

「限られた分野で話をすると、少し会話が出来るようになっていた。」

「積極的な学生が多いので、授業中はいつも賑わっている。」

(第7週：11月2日～11月6日)

NUT06 について

「今回の授業では、学生がしっかり集中しており、問題を解こうとする姿勢が見られた。留学試験が近いめだと思われる。」

「唯一残念なのが、欠席が多かったことだ。」

「質問がなかったのが残念だった。」

NUT08 について

「08期生が日に日に話せる単語が増えてきており、学生も新しい日本語が話せるうれしさのためか、毎日の授業がとても盛り上がっている。」

(第8週：11月9日～11月13日)

NUT06 について

「留学試験が終わったためか、学生が非常に少なかった。」

「いつも宿題を出している学生しか来ていなかった。」

「宿題を出さない学生は授業にまで来なくなった。」

「どの学生も日本に行きたい理由が、曖昧すぎて弱い気がした。」

「授業を淡々とこなしているせいか、退屈な授業になっているようだ。もう少し学生の身になって、惹きつける授業が出来るようになりたい。」

「授業に来ていない学生については、まず授業には参加してほしい。」

(第9週：11月16日～11月20日)

NUT06について

「しかし、集中力があまりないためか、長続きしない。」

「どの学生も目標は持っているのだが、曖昧な内容が多かった。」

「自分で大学の特色を調べることがなく、惰性的な行動が多い気がした。」

「NUT06期生よりもNUT08期生の方が質問も多く出ていたのが残念だった。」

(第10週：11月23日～11月28日)

NUT06について

「学生も材料学に近い分野を学習しているらしく、専門用語をかみ砕いた日本語で伝えると、ほとんどの学生が理解していた。」

「結晶の方向については学生の理解が早かった。」

NUT08について

「最後の漢字読みテストでは、相談や教科書を見るなどといったカンニング行為がとても多かった。」

(第11週：11月30日～12月4日)

NUT06について

「人数が少なかったのが残念だったが、よく集中していた。」

NUT08について

「学生が多く、かつ積極的な学生が多いので、とても賑わっていた。」

「しかし、数が多いので、騒がしくなりやすい気がした。」

ハノイ国家大学の授業を見学して

「教室の後ろの方に座る学生がまったくおらず、全員前の方に集中していた。」

(第12週：12月7日～12月11日)

NUT06について

「宿題の提出するように呼びかけても、出さなかった学生が多かったので、もし、次に何かの教科を担当することがあれば、宿題については、別の方法を考えたい。」

「提出していく学生が少しずつ増えてはいるが、もう少し早くから取り組んでほしかった。」

(第13週：12月14日～12月18日)

NUT06について

「もう少し計画を立てて、動いてほしい。」

NUT08について

「漢字の意味をしっかりと理解して書く学生と、書くだけ書いてあとは隣の人と話している学生が半分ずつだった。」

「授業が賑やかなので楽しそうだが、騒がしくなりすぎる時もあった。」

「また、以前と比べてテストで隣の人と話すといったカンニング行為が少なくなっているように思った。」

(第14週：12月21日～12月25日)

「面接でよく聞かれる項目に対しては、答えられている学生が多かったが、予期せぬ質問が来ると、視線が下がったり、言葉が少なくなったりとまだまだ練習して慣れていく必要がある。」

(第15週：1月4日～1月8日)

NUT06について

「面接審査の日が近付いているので、積極的に面接の練習をする学生が多い。」

「だが中には、面接の練習に来ない学生もいる。」

「面接の練習をしている学生については、志望理由などの一般的な質問に対してであれば、基本的には質問されたことに対して返答できており、面接の雰囲気慣れしてきたように感じる。」

(第16週：1月11日～1月15日)

NUT06について

「積極的に練習をしている学生は、難しい質問に対しても考えて答えられる余裕が出てきたように思われる。」

「口頭試問の方でも、面接の練習の回数を重ねるにつれて、落ち着きが出てきているので、問題もしっかり解けるようになっている。」

「また、ホワイトボードの方を向いて解説をする学生も少なくなり、きちんと試験管の方を向いて解説をするようになってきている。」

「しかし、一部の学生については面接練習をしていて、まだ不安な印象を受ける。」

「満足のいく結果になって欲しい。」